多賀城市文化財調査報告書第10集

山王遺跡

—昭和60年度発掘調査報告書Ⅱ—

昭和61年3月

多賀城市教育委員会

多賀城市文化財調査報告書第10集

山王遺跡

—昭和60年度発掘調査報告書Ⅱ—

序

多賀城市の埋蔵文化財包蔵地は、特別史跡多賀城跡附寺跡が所在する高崎・市川の丘陵周辺部を中心として、西部の水田地帯に広く分布しています。近年、西部地区の包蔵地内で開発行為が増加しており、市教育委員会では、開発に伴なう事前調査を実施しています。

今回、調査を行なった山王遺跡千刈田地区は、土器や瓦が多く散布するところとして知られておりましたが、調査の結果、奈良～平安時代にわたる竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡4棟、井戸跡1基などが発見され、特に、曲物を利用して水溜めを施設している井戸跡は、本遺跡では初めての発見であり、掘立柱建物跡とともに多賀城跡周辺地域の集落を考える貴重な資料であると思われます。

最後になりましたが、今回の調査は、初冬の11月から翌年2月まで冬季間であるため、北風の中、連日作業に当たられた作業員の方々には大変御苦労をおかけしました。また、調査の際に助言を賜った関係諸機関の方々に対し、心から御礼を申し上げる次第です。

昭和61年3月

多賀城市教育委員会

教育長　玉　蟲　　誼

例　　言

1．本書は、多賀城市教育委員会が、昭和60年度の国庫補助事業として実施した「山王遺跡他発掘調査」の結果をとりまとめたものである。

2．調査区は、山王千刈田地区に位置し、ＳＮ－ＳＤの略称を用いて記録している。

3．発掘基準線は、国家座標の方位を取っており、南北基準線ＮＳ00と東西基準線ＥＷ00の交点は、Ｘ：－189,011.600、Ｙ：＋12,927.943である。

4．本報告書の作成にあたっては、高倉敏明、石川俊英、千葉孝弥が協議を行ない、第Ⅱ章を高倉が、その他を石川、千葉が執筆し、編集を行なった。

5．遺物の整理については、滝口裕子、犬妻悦子、柏倉霜代、須藤美智子、熊谷純子、黒田啓子の協力を得た。

6．調査及び報告書の作成にあたっては、宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史資料館諸氏から指導、助言を得た。

7．土層の土色については、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄：1976）を参照した。

8．調査、整理に関する諸記録、及び出土遺物は多賀城市教育委員会が一括保存している。

目　　次

Ⅰ．山王遺跡の環境と考古学的調査成果 …… 1
Ⅱ．調査に至る経緯 …… 3
Ⅲ．調査方法と経過 …… 4
Ⅳ．発見遺構と遺物 …… 5
（1）竪穴住居跡 …… 5
（2）掘立柱建物跡 …… 7
（3）井　戸　跡 …… 10
（4）土坑・溝跡 …… 15
（5）遺構外出土遺物 …… 16
Ⅴ．考　察 …… 17
（1）遺構の変遷と年代 …… 17
（2）遺構の性格 …… 20

調査要項

1．遺跡名　：山王遺跡（千刈田地区）
2．所在地　：宮城県多賀城市山王字千刈田22－1
3．調査期間　：昭和60年11月21日～昭和61年2月15日
4．調査面積　：378㎡（対象面積800㎡）
5．調査主体者：多賀城市教育委員会　教育長　玉蟲　誼
6．調査担当　：多賀城市教育委員会　社会教育課文化財保護係
社会教育課長　柳原邦男
文化財保護係長　高倉敏明
技　　師　滝口　卓　　石川俊英　　石本　敬
主　　事　柏原靖史
嘱　　託　千葉孝弥　　相沢清利
7．調査協力者：宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史資料館、阿部祐悟、後藤三郎(地権者)
8．調査参加者：佐々木四郎、桜井三千夫、黒崎庸治、加藤文一、下道博信、赤間かつ子、阿部敏子、阿部トシ子、阿部美智子、阿部美津子、阿部米子、紫俣敏子、遠藤一代、小野玉乃、熊谷きみ江、熊谷好子、後藤はつみ、桜井栄子、佐藤節子、鈴木　弘、菅原稲代、角田静子、早坂あみ子、本田ノブ子、渡辺園恵

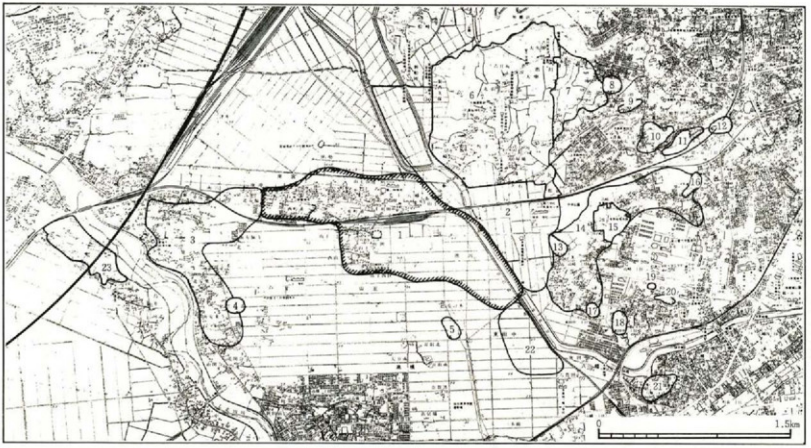
Ⅰ　山王遺跡の環境と考古学的調査成果

多賀城市は、市内をほぼ二分して流れる砂押川によって、東部・北部の丘陵台地部と、南部・西部に広がる平野部とに大きく区分されている。この平野部は、地理的には広義の仙台平野に含められるもので、山王遺跡はその最北端の一角に位置している。本遺跡は、砂押川によって形成された東西に長い自然堤防上に占地しており、海抜約５ｍを計る。

山王遺跡は東西1.7㎞、南北0.7㎞に及ぶ広大な遺跡で、東に接する市川橋遺跡とともに、多賀城の南面に展開している集落跡としてその性格が次第に明らかにされてきている。周辺の各遺跡の内容については、これまで幾度となく述べているので、今回は山王遺跡内におけるこれまでの調査成果について説明し、今回の調査を理解していく一助としたい。

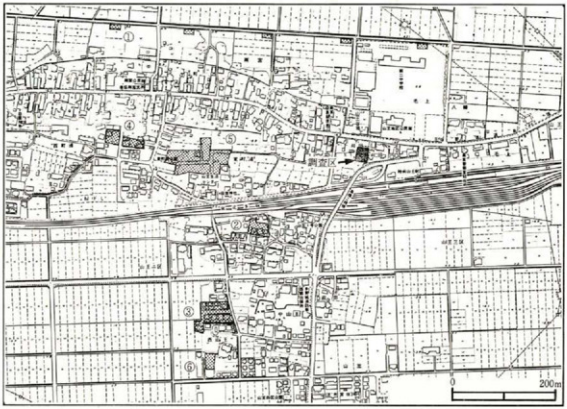
山王遺跡における考古学的な調査として最も早いものは、昭和53年に実施された流域下水道工事に伴なう調査である。この調査は、宮城県文化財保護課が担当し、溝跡や土坑などを検出している。遺物は、古墳時代後半から平安時代のものまで出土している。昭和54年には、東北本線の南側に所在する中山王地区と山王Ⅱ区の２ヶ所で調査を行なっている。中山王地区からは掘立柱建物跡１棟、土坑10数基、溝跡４条の他小柱穴を多数検出している。遺物は土師器、須恵器などとともに石帯や鉄刀などが出土している。山王Ⅱ区では竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡１棟、土坑５基、溝跡６条の他小柱穴などを発見している。昭和55年には西町浦地区、更に昭和58年には東町浦地区の調査を行なった。その結果、西町浦地区からは棟方向を同じくする平安時代の掘立柱建物跡２棟、竪穴住居跡３軒の他多くの井戸跡を発見している。さらに東町浦地区からは両脇に側溝を伴なった東西方向に走る幅10数メートルの道路状遺構、その北側には重複する数棟の掘立柱建物跡、井戸跡、土坑などを検出し、多賀城周辺地域における集落のあり方について興味深い資料を提供することとなった。また、この両地区からは、古墳時代の遺構や遺物も豊富に出土している。西町浦地区からは多量の土器を出土した土坑や溝跡を検出し、臼玉、ガラス玉、コハク玉などの玉類や滑石製模造品が出土している。一方、東町浦地区からは幅３ｍの環濠や西町浦地区で検出したような溝跡、土坑なども発見している。共伴関係は明らかではないが、この両地区からは古墳時代の須恵器が少なからず出土しており興味深い。昭和60年には再び山王Ⅱ区の調査を行ない、平安時代から近世までの溝跡、土坑、井戸跡を発見している。

これまで述べてきたように、山王遺跡では、ほぼすべての地区から掘立柱建物跡が発見されており、遺物についてみても瓦、施釉陶器、墨書土器などが普遍的に出土している。このようなあり方は、市川橋遺跡などにも共通し、国府多賀城の南面に位置するという立地条件とともに本遺跡の性格を考える上でかなり重要な意味を持つものと考えられる。



1 山王遺跡（古墳、奈良、平安）
2 市川橋遺跡（奈良、平安）
3 新田遺跡（古墳、奈良、平安）
4 安塚寺遺跡（古代、中世）
5 大日北遺跡（奈良、平安）
6 特別史跡多賀城跡（奈良、平安）
7 西沢遺跡（奈良、平安）
8 法蓮殿遺跡（　〃　）
9 高殿遺跡（　〃　）
10 小沢館遺跡（　〃　）
11 野田館跡（奈良、平安、中世）
12 矢作ヶ館跡（奈良、平安、中世）
13 九山窯古墳群（古墳）
14 高畑遺跡（奈良、平安、中世）
15 特別史跡多賀城廃寺跡（奈良、平安）
16 留ヶ崎館跡（近世）
17 東田中窯跡遺跡（中世）
18 忍引遺跡（旧石器、古代、中世）
19 稲荷殿古墳（古墳）
20 桜井館跡（中世）
21 八幡館跡（中世）
22 六貫田遺跡（奈良、平安）
23 仙台市海ノ底遺跡（古墳、奈良、平安、中世）

第1図　遺跡分布図



① 流域下水道工事に伴なう調査（昭和53年度調査）
② 中山王地区（昭和54年度調査）
③ 山王Ⅱ区（昭和54年度調査）
④ 西町浦地区（昭和55年度調査）
⑤ 東町浦地区（昭和58年度調査）
● 山王Ⅱ区（昭和60年度調査）

第2図　調査区位置図

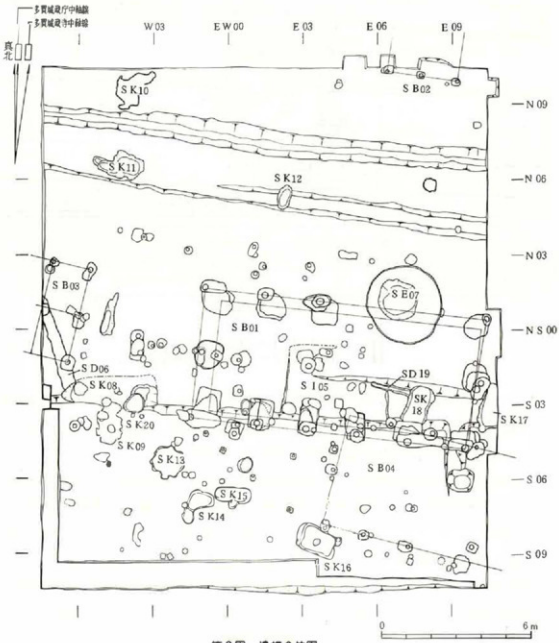
Ⅱ　調査に至る経緯

ここ数年、本市西部地区では、仙台市に隣接する地理的条件により、埋蔵文化財に係る調査件数も次第に多くなって来ている。当地区の宅地化の傾向は今後一層強まるものと考えられる。山王遺跡の開発行為に伴なう発掘調査は、前項で述べた通りである。

本件については昭和60年度に入ってから開発計画が示され、発掘調査についての照会があったので、検討を行なった。当該地は宅地内に残された畑地であり、陸前山王駅西側の陸橋の下に位置している。この辺一帯は、以前から古瓦の散布が多い地域として知られており、南側に隣接する陸前山王駅拡張工事の際にも多量の土器、瓦、陶器類が出土したと言われている。開発計画地の分布調査を行なったところ、土師器や須恵器が散布していることから、古代の遺構、遺物が包蔵されていることが推察された。そこで、申請者と協議を行ない、住宅建設予定地の発掘調査について同意が得られたので、本調査を実施したものである。

Ⅲ　調査方法と経過

今回の調査は、開発の計画が出されていた山王遺跡千刈田地区を対象として実施した。調査に先立ち、三角測量によって原点移動を行ない、調査予定地内に基準点を設置した(11月22日)。調査区は、東西18m、南北21mの378㎡である。調査対象地区は、現況が畑地となっていたため遺構面までの深さを知ることを目的とし、三ケ所で坪掘りを行なった(11月27日)。この結果、北側では厚い盛土の下に旧水田面があり、地山はかなり削平を受けていることが予想された。



第3図　遺構全体図

一方、南側では表土の下に遺物を多量に含む黒褐色の土層があったので一応包含層の可能性も考えた。12月2日より重機を導入し、北半部の盛土や水田床上の除去を行なった。南半部は取り敢えず表土のみ除去し、層序を調べるため東壁際にトレンチを入れて地山まで掘り下げた。その結果、その黒褐色土層は、旧水田上に行なった現代の盛土層であることが判明し、直ちに除去した(12月15日～21日)。ここまでの作業で、北半部も南半部も地山まで削平を受けているため、遺構はすべて地山上で検出できることを確認した。南半部の盛土除去作業と並行して、北半部では12月4日より遺構検出作業を開始し、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土坑、溝跡などを検出し、北側のものより順次掘り込みを行なった。これらの作業と並行して、平面図を作製するための遣り方を設定した（12月23日)。遺構は、調査区中央部に多く北半部は比較的疎らであった。中央部では南北2間、東西5間の掘立柱建物跡（ＳＢ01）を検出しているが、この建物跡は竪穴住居跡（ＳＩ05)、井戸跡(ＳＥ07)、小規模な掘立柱建物跡(ＳＢ04）などと重複しており、これ自体も建て替えられていることが考えられた。そしてＳＩ05竪穴住居跡→ＳＢ01掘立柱建物跡→ＳＥ07井戸跡、ＳＢ04掘立柱建物跡という全体の変遷の大筋をとらえて一応年内の調査を打ち切った（12月27日)。翌年、1月6日より調査を再開した。ＳＢ01建物跡はほぼ同位置で建て替えているため、柱穴の輪郭が見極めにくく難渋したが一応2～3時期のものが重複していると理解した。こうして、ほとんどの遺構の掘り込みを終え、1月30日調査区の全景写真を撮影した。その後は、柱穴の断ち割りや全体の補足調査を中心に作業を進めた。ＳＢ01建物跡は、柱穴を断ち割りした後、更に検討を加えた結果、建て替えは一度であることを確認した。2月12日、遺構保存のため途中まで山砂を入れて埋め戻し、2月15日、器材の撤出を以て全ての作業を終了した。

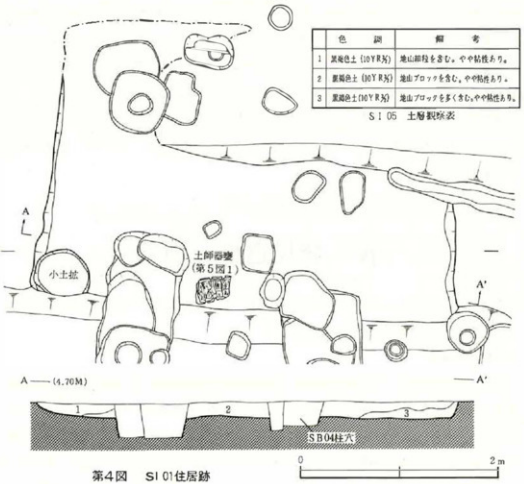
Ⅳ　発見遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構は、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡4棟、井戸跡1基、土坑12基、溝跡2条、及び多数の小柱穴である。

1．竪穴住居跡

ＳＩ05竪穴住居跡　　ＳＩ05住居跡は、調査区ほぼ中央部の地山上で検出した竪穴住居跡である。旧畦畔の真下にあったため、その部分のみが開田による削平をまぬがれ、わずかにその形状をとどめていた。しかし全面的に削平を受けており、壁は約18cmを残すにすぎない。ＳＢ01・04建物跡、ＳＤ19溝跡と重複しており、それらより古い。平面形は不明であるが、規模は、残存している部分についてみると、西壁が1.6m、東壁は1.4mまで検出しており、東西幅は4.2m

を計る。方向は、西壁でみると北で約8度東に偏している。貼り床の痕跡は認められず、周溝、柱穴、カマド等も一切検出できなかったが、西壁に接して径約55cm、深さ4cmの浅い小土坑を検出している。埋土は、地山のブロックや小粒を含む黒褐色土である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕などが出土している。それらの大部分は埋土中より出土したもので、第5図1の土師器甕のみが床面に横倒しのまま潰れた状態で出土している。この土師器甕は、頸部に弱い段を有するもので底部は欠損している。外面はハケメ調整を施し、その後口縁部をヨコナデしているが、体部下半には部分的に弱いヘラケズリがみられる。内面は、摩滅のため明らかではないが、下半部はヘラナデ調整されている。次に埋土中の遺物についてみると、土師器の杯・甕はすべて非ロクロ調整である。須恵器は土師器に比べ量的には少ないが、底部を回転ヘラケズリした杯が1点出土している(第5図2)。これは破片となって西壁際からまとまって出土したものである。

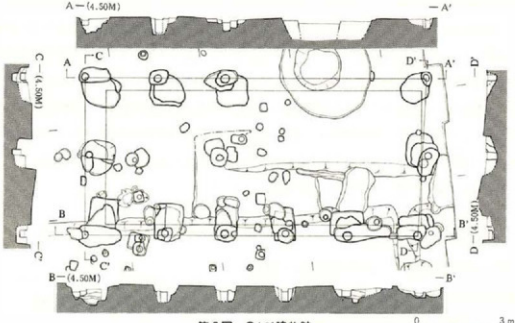


第4図 SI01住居跡

第5図　SI01住居跡出土遺物

2．掘立柱建物跡

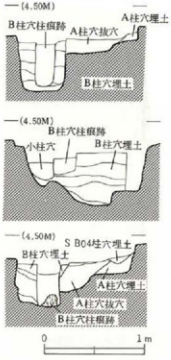
(1)　SB01建物跡　　SB01建物跡は、調査区の中央部やや東寄りの地山上で検出した東西5間、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。SI05住居跡、SB04建物跡、SE07井戸跡、SK17・18土坑と重複しており、SI05住居跡より新しいが他のものより古い。建物跡はほぼ同位置で二時期の重複があることを確認できた。しかし、後世の削平により古いA期のものについては検出できなかった柱穴があり、痕跡程度にしか残っていないものが多い。以下古い順にその概要を記していく。



第6図　SI01建物跡

ＳＢ01Ａ　南側柱列が比較的残りがよく、形態を把握することができた。柱穴は長方形を呈するものが多く、規模は、長辺115cm、短辺80cmである。埋土は、地山ブロックなどをあまり含まない黒褐色土である。柱穴にはすべて抜き取り穴が検出されており、柱位置の知れるものはない。Ａ期の柱穴は全体に浅く、残存状況の良いものでも深さ55cmを計るのみである。底面はほとんどのものが平坦である。抜き取り穴は不整形を呈し、埋土はＡ期の柱穴埋土と同様黒褐色土であるが若干汚れが目立っている。

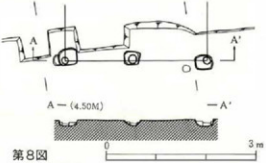
ＳＢ01Ｂ　Ａ期の柱穴を抜き取った後、若干外側へ拡張して建て替えたものである。Ｂ期の柱穴は残存状態が良く、検出できたすべての柱穴で柱痕跡を確認している。方向は南側柱列で見ると、東で6度24分南に偏している。柱間は、桁行が北側柱列で西より2.26m･2.26m･(３間分で) 6.69mで総長は11.21m、南側柱列で西より2.67m・1.99m・2.03m・2.08m・2.31mで総長は11.09mである。一方梁行は西妻が北より2.56m・2.70mで総長5.25m、東妻が北より2.63m・2.68mで総長5.29mである。柱穴は楕円形を呈するものが多く、規模は長径50cm、短径45cmのものから長径145cm、短径75cmのものまでばらつきがある。Ｂ期の柱穴はその形態から２つのタイプが認められる。一つは柱穴が小さく、壁も段掘りし、柱はその一方の壁と底面に密着させているもので、埋土は互層にしているものと互層を呈しないものとがあり、後者が多い。もう一つは柱穴がやや大きく、壁はほぼ垂直に掘られているもので、柱は底面に接着せず浅い位置にあり、埋土は版築して互層を呈しているものである(図版2-3)。東妻南の隅柱及び南側柱列より１間目の柱穴は後者に属し、布掘りしている可能性が大きい。柱は、材木が中ば炭化しながら残存していたものがあり、径25cmである。これらの柱の中には地山に15cmもめり込んでいたものがある。



第７図　ＳＢ 01建物跡柱穴断面図と出土遺物

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土しており、土師器杯にはロクロ調整のものと、ロクロ未調整のものとがある。

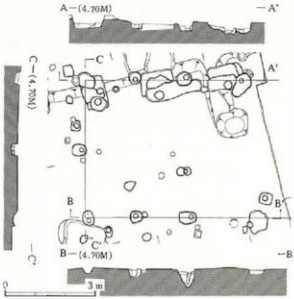
(2)　ＳＢ02建物跡　ＳＢ02建物跡は、調査区北東隅の地山上で検出した掘立柱建物跡である。東西に並ぶ柱穴を２間分検出したに



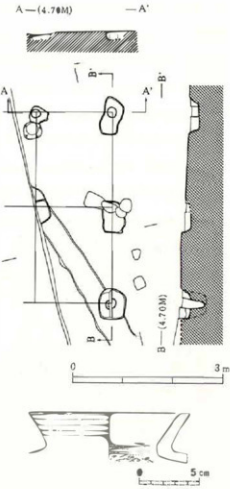
第８図
ＳＢ 02建物跡

すぎないが、これより東西にのびないことを確認しているので、これらを南妻とした南北棟の建物と考えておきたい。本建物跡の方向は、東で8度28分南に偏している。柱間は、西より1.37m・1.48mで総長2.85mである。柱穴は長軸40cm、短軸35cmの隅丸長方形を呈し、埋土は地山ブロックを含む黒褐色土である。柱は、柱痕跡より径15cmである。遺物は出土していない。

(3) ＳＢ03建物跡　　ＳＢ03建物跡は、調査区西端の地山上で検出した掘立柱建物跡である。大半が調査区外へのびるため明らかではないが、東西1間、南北2間の南北棟とすると極端に狭い建物となるので、ここでは一応南北2間、東西2間以上の総柱の建物と考えておきたい。ＳＤ06溝跡と重複し、それより新しい。建物の方向は、東妻でみると北で13度53分東に偏している。柱間は、柱痕跡を確認していないものを柱穴の中心に想定すると、東妻が北より約2.1m・約1.7mで総長3.83m、北側柱列は1.52mである。柱穴は、隅丸長方形を呈するものと不整形のものとがあり、埋土は地山ブロックを含む黒褐色土である。



第10図　ＳＢ04建物跡



第9図　ＳＢ03建物跡と出土遺物

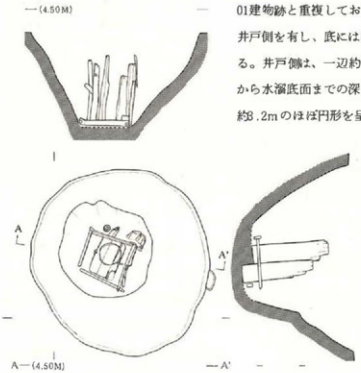
この内、断ち割りを行なった南東隅の柱穴についてみると、浅い掘り方の底面より深く突きささった状態の柱痕跡を確認している。この柱痕跡の先端は、尖頭状を呈しており、柱を打ち込んで固定したものと考えられる。柱は、柱痕跡より径18cmである。遺物は、須恵器甕の口縁部破片が1点出土している(第9図)。胎土は緻密で灰色を呈し、緑色の自然釉が厚くかかっている。

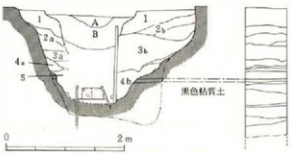
(4) ＳＢ04建物跡　　ＳＢ04建物跡は、調査区南東隅の地山上で検出した南北2

間、東西4間以上の東西棟掘立柱建物跡である。ＳＢ01建物跡、ＳＩ05住居跡、ＳＫ16土坑と重複し、ＳＫ16土坑より古いが、他のものよりは新しい。方向は、北側柱列でみると東で14度45分南に偏している。柱間は、柱痕跡を確認していない柱穴をその中心に想定すると、北側柱列が西より約1.7m・1.71m・1.83m、南側柱列が西より約1.6m・1.84mで総長についてはいずれも不明である。一方西妻の梁行は、北より約2.3m・約2.4mで総長は約4.6mである。柱穴は、円形を呈するものと楕円形のものとがあり、埋土は、地山ブロックを含む黒褐色土である。柱は、柱痕跡より径13cmである。これらの柱穴の内、南側柱列の西妻より2間目の柱穴の柱は、底が尖ったものを用いているが、掘り方の内におさまるもので、打ち込んだものではない。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯、鉄滓などが出土している。

3．井戸跡

ＳＥ07井戸跡　ＳＥ07井戸跡は、調査区中央部東側の地山上で検出したものである。ＳＢ01建物跡と重複しており、それより新しい。木組の井戸側を有し、底には曲物の水溜を備えたものである。井戸側は、一辺約90cmの正方形を呈し、確認面から水溜底面までの深さは1.6mである。掘り方は径約8.2mのほぼ円形を呈している。井戸の構造についてみると、四隅に支柱を立ててそれに横桟を取り付け、それらによって縦方向に立て並べた板材を固定する形態のものである。水溜は、掘り方底面に隅丸長方形の板を敷き、これの長辺両脇を細長い杭でしっかりはさんで固定し、この上に幅38.3cm、

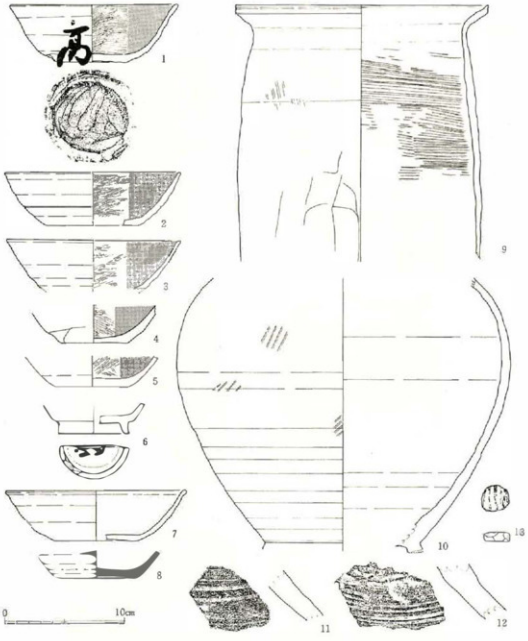




	色調	備考	
1	黒褐色（10Y R3/1）	地山の砂が層状に入る	掘り方
2 a	緑灰色（10G 5/1）	砂	
2 b	黒褐色（10Y R3/1）	地山の砂が層状に入る	
3 a	黒褐色（10Y R3/1）	砂を含む	
3 b	緑灰色（10G 5/1）	砂	
4 a	緑灰色（10G 5/1）	砂	
4 b	緑灰色（10G 5/1）	砂	
5	黒褐色（10Y R3/1）	砂を含む	
A	黒色（10Y R1/1）	粘質土	抜き穴
B	黒色（10Y R1/1）	粘質土、砂を含む	

第11図　SE07井戸跡

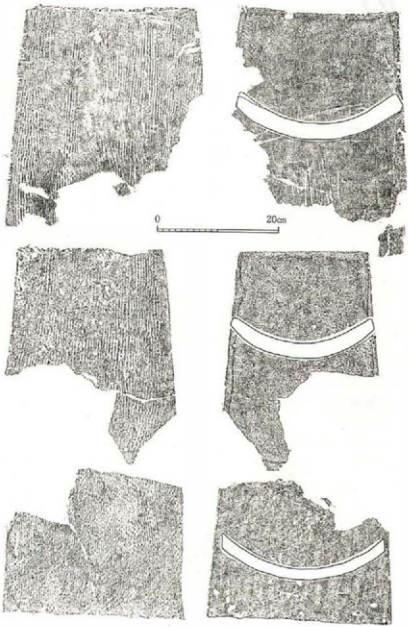
高さ20.4cmの曲物を載せている。曲物は、板に直接固定されていないことから、下方を埋め戻して固定したものと考えられるが、その点は明確にできなかった。曲物の中位には、5ヶ所に穿孔されており、水が入り込み易いように工夫されている。井戸側は大部分が抜き取られてお



1～3・5　土師器杯　抜き穴出土
4　土師器杯　掘り方出土
6　須恵器高台付杯（墨書？）掘り方出土
7　須恵器杯　抜き穴出土
8　須恵器杯　掘り方出土
9　土師器甕　抜き穴出土
10　須恵器瓶　抜き穴出土
11　土製カマド　抜き穴出土
12　土製カマド　抜き穴出土
13　円盤状土製品　抜き穴出土

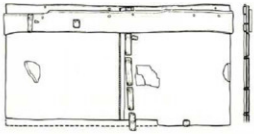
第12図　SE 07井戸跡出土遺物（1）

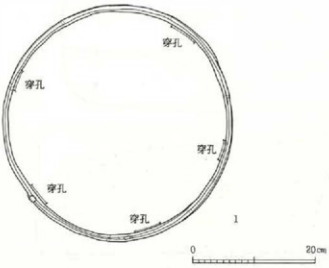
り、残存状況は良くない。抜き穴は、井戸側の周囲から掘り込まれており、残存している部材も原位置を保っているものは少ない。この抜き穴は、南側が最も深く、掘り方の底より20cm下がっている。板材の残りも南側が最も悪い。埋土についてみると、掘り方埋土は砂質土（地山）を主体とする層と、粘質土を多く含む層とが互層を呈している。井戸内埋土は、抜き穴のため明確にはとらえられなかったが、水溜を覆っているしまりのない柔かい層がそれに相当すると

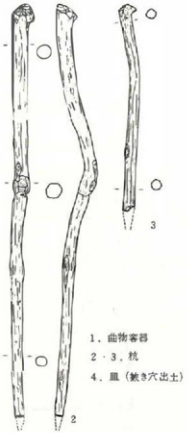


1・3	凸面：叩き目	凹面：布目→部分的ナデ
2	凸面：つぶれ気味の叩き目	凹面→ナデ

第13図　SE 07井戸跡出土遺物(2)



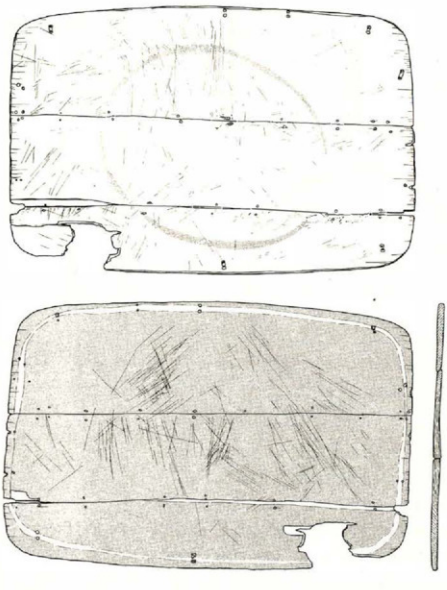




考えられる。また、抜き穴埋土は全体に粘性を帯びた黒色土で炭化物を多く含む部分もある。

遺物は土師器、須恵器、赤焼き土器などの土器類、土製カマド、円盤状土製品、木製品、植物遺体などで比較的多くのものが出土している。特に抜き穴から多量に出土しており、その中には火を受けているものが多い。土師器には、杯(第12図１～５)・高台付杯・甕（第12図９）があり、大部分がロクロ調整されたものである。第12図１はロクロ調整された土師器の杯である。ロクロから切り離した後、底部に粘土を足して底上げを行ない、指で粗くナデ調整している。糸切痕がわずかに観察される。体部に「高」の文字が墨書されている。第12図９はロクロ調整された長胴形の甕である。内外とも炭化物が厚く付着しており、特に外面が著しい。須恵器には杯（第12図７・８)・高台付杯・瓶・短頸壺の蓋・甕などがある。第12図６は高台付杯である。底部外面には墨痕が観察されるが判読は不明である。第12図10は瓶である。口縁部及び底部を欠損している。赤焼き土器は杯の破片が少数出土してる。第12図11・

第14図　SE 07井戸跡出土遺物(3)



第15図　SE 07井戸跡出土遺物(4)

0　20cm

12は土製カマドの体部破片である。全体の形態は明らかではないが、裾の広がる截頭円錐形に近い形態を呈するものと推定される。内外両面ともヨコナデ調整しているがあまり丁寧ではない。内面は黒く煤けている。第12図13は須恵器甕の体部破片を加工した円盤状の土製品である。瓦は丸瓦と平瓦とが出土しており、平瓦は一枚造りのものが多い(第13図1～3)。木製品には皿・曲物容器・折敷・杭などがある。第14図1は水溜に転用された曲物容器である。平面形は円形を呈するもので、側板のみ残存している。側板は、重ね合わせた部分を2ヶ所樺皮紐を通し

て綴り合わせている。綴り合わせ部分には、あらかじめ端の位置を決めたと思われる刻線が見られる。この側板には、下端に箍を回して補強しており、この外側から木釘を打ち込んで底板を止めている。底板は残存していない。側板の中には木釘の残存しているものがあり、径0.3～0.5cmである。この内、底板との結合孔は6ヶ所で、不均等に穿っている。また、箍の外側から打ち込んで側板まで達していないものも5ヶ所あり、これも不均等に穿っている。側板内側には、側板を円筒形に曲げるためのケビキが施されている。これは、全体に縦線を刻んだもので、部分的に斜めの線を入れて斜格子風にしたり、更に反対からも斜めの線を入れたりしている。側板の中位5ヶ所には、やや均等に穿孔を施している。なお、この曲物は、井戸の水溜として用いた際には底板を取りはずし、底を上にして用いたものと考えられる。第15図は、水溜の下敷きに転用された折敷の底板である。やや調の張った隅丸長方形を呈し、長辺68cm、短辺45cm、厚さ1.2cmである。側板は残存していないが圧痕が残り、その両脇に穿たれた結合孔には樺皮紐が残存しているものもある。この結合孔は12対穿たれている。内面は側板痕の外側を除き、全面黒色を呈している(註)。また、中央部を中心に刃痕と思われる細い条痕が多数見られる。これは外面の方がより多く、しかも広い範囲に観察される。なお、外面には、水溜の下敷きとして用いられた際に付いた曲物容器の圧痕が明瞭に残っている。この底板は、木目に沿って大きく三つに割れているが、一方には10対、もう一方には9対の結合孔が割れ口に沿って穿たれている。これは、下敷きに転用する際の補修痕かと推定される。第14図2・3は、水溜の下敷き板を両脇からはさみ込んでいた杭である。一部残存状況が良くないため図示できなかったが、少なくとも2に関しては先端を尖らしたものであったことを確認している。いずれも樹皮を剥ぎ取って用いている。第14図4は皿である。底部を高台状に削り出したもので挽き物と思われるが腐食が著しく明瞭な痕跡は認め難い。この他、抜き穴埋土中からヒョウタンの破片が出土している。

(註) 柿渋による塗装と考えられるが、漆塗りの可能性もある。

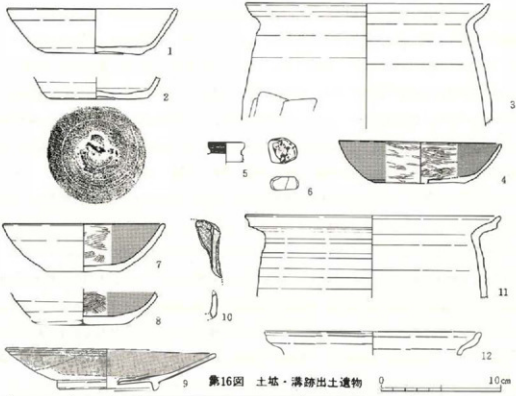
ケビキ模式図

4. 土 坑 ・ 溝 跡

これらについては以下の表に示した。検出面はすべて地山である。

遺構名	平面形	重 複 関 係	長軸×短軸×深さ m	遺 物
SK 08	不整形	SK 20 → SK 08 SD 06 → SK 08	3.8×0.8×（0.14～0.4）	土師器杯A(第16図7・8)・甕(第16図11・12)・耳皿(第16図10)・蓋(第16図5)、須恵器杯・蓋、円盤状土製品(第16図6)、瓦(平・丸)、紡錘車(第16図9)、赤焼き土器
SK 09	不整形	な し	1.7×0.95×0.07	土師器（第16図4）
SK 10	不整形	な し	2×1.22×0.06	土師器杯、須恵器杯
SK 11	不整形	な し	2.06×1.46×0.22	な し
SK 12	長楕円形	な し	0.98×0.52×0.23	土師器杯・甕・鉢、赤焼き土器
SK 13	不整形	な し	1.25×1.2×0.14	土師器杯、須恵器瓶
SK 14	不整形	な し	1.42×1.02×0.3	土師器杯・甕、須恵器杯（第16図1・2）・甕

SK15	不整形	なし	1.45×0.85×0.16	土師器杯・甕、須恵器甕
SK16	長方形	SB04 → SK16	1.74×0.95×0.23	なし
SK17	方形	SB01 → SK17	1.7×0.85×(0.03～0.14)	土師器杯・甕、須恵器杯・甕・鞴の羽口
SK18	方形	SB01 SD19 → SK18	1.48×1.09×0.34	なし
SK20	楕円形	SK20 → SK08	0.85×0.75×0.37	なし
SD19	東西溝	S105 → SD19 → SK18	全長1.6m以上	土師器杯・甕（第16図3）、須恵器杯・甕
SD06	南北溝	SD06 → SB03 SK04	全長3.5m以上	土師器杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器

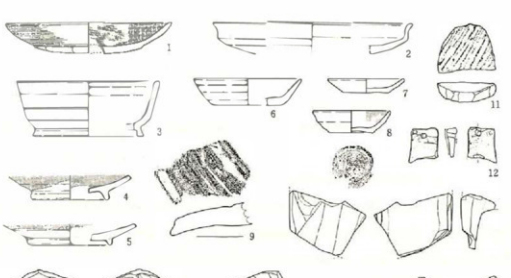


第16図　土坑・溝跡出土遺物

No	遺構	種別	器種	外面	内面	備考
1	SK14土坑	須恵器	杯	ロクロナデ、底部←回転ヘラ切り	ロクロナデ	
2	SK14土坑	須恵器	杯	ロクロナデ、底部←回転ヘラ切り	ロクロナデ	
3	SD19 溝	土師器	甕	ロクロナデ、体部←ヘラ削り	ロクロナデ	
4	SK9土坑	土師器	杯	ヘラ削り→ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ、黒色処理	
5	SK8土坑	土師器	壷	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ、黒色処理	
6	SK8土坑	須恵器	甕	平行叩き		円盤状に加工
7	SK8土坑	土師器	杯	ロクロナデ、底部回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	
8	SK8土坑	土師器	杯	ロクロナデ、底部回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	
9	SK8土坑	灰釉陶器	椀	ロクロナデ	ロクロナデ	黒笹90号窯式　東濃産
10	SK8土坑	土師器	羽釜	黒色処理	黒色処理	
11	SK8土坑	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	
12	SK8土坑	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	

5．遺溝外出土の遺物

調査区全域を覆っていた現代の盛土からは多くの遺物が出土している。その内、主なものについて実測図を掲げる。

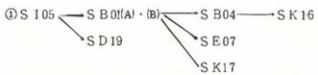


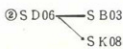
第17図　遺構外出土の遺物

No	種別	器種	外面	内面	備考
1	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 底部手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	国分寺下層式 非ロクロ製整
2	須恵器	壺	ロクロナデ	ロクロナデ	
3	須恵器	高台杯	ロクロナデ	ロクロナデ	
4	灰釉陶器	椀		重ね焼き痕残る	折戸53号窯式 釉－漬け掛け
5	灰釉陶器	椀	底部 回転糸切り	重ね焼き痕残る	黒笹90号窯式 東濃産
6	カワラケ	小皿	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	
7	カワラケ	小皿	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	
8	カワラケ	小皿	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	口縁部油煙付着
9	土製ミニ下			一部赤変	
10	須恵器	瓶			底部穿孔
11	須恵器	甕	平行叩き		口縁部を加工
12	石製品	硯石			0.5cmの孔がある
13	二面硯		工具によるナデ	黒鉛付着ナデツケ→周縁をヘラケズリ	
14	円面硯				
15	須恵器	甕	平行叩き	ロクロナデ	円盤状に加工
16	須恵器	甕	ヘラケズリ	ロクロナデ	円盤状に加工

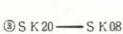
V　考　察

(1)　遺構の変遷と年代　　今回の調査で発見した主な遺構は、掘立柱建物跡4棟、竪穴住居跡1軒、井戸跡1基、土坑12基、溝跡2条である。これらについて、重複関係を整理すると次の通りである。





＊重複関係なし……ＳＢ02、ＳＫ10・11・12・13・14・15



上記①により、竪穴住居跡（ＳＩ05）→掘立柱建物跡（ＳＢ01）→掘立柱建物跡（ＳＢ04）→土坑（ＳＫ16）、並びに竪穴住居跡→掘立柱建物跡→井戸跡（ＳＥ07）という遺構の変遷を理解することができる。更に、建物跡の主軸方位から分類を行なうと

Ⓐ北で約６度～８度東に偏るもの…ＳＢ01・ＳＢ02

Ⓑ北で約14度東に偏するもの……ＳＢ03・ＳＢ04

という２類に分けることができる。ＳＢ03・04建物跡は方向的に一つのまとまりを持っており、柱穴の規模、埋土、柱穴底面のレベルなども近似しており、同一時期の所産である可能性が大きい。一方、ＳＢ02建物跡は、柱穴の規模、埋土、柱穴底面のレベルから見ればＳＢ03・04建物跡に共通性が見られるが、方向的にはＳＢ01に類似している。しかし、ＳＥ07井戸跡と小型の建物跡との関係、ＳＤ06溝跡とＳＩ05住居跡・ＳＢ01建物跡との関係は明らかにできなかった。

次に各遺構の年代について検討する。ＳＩ05住居跡出土土器は、床面に残されていたものが土師器甕１点のみであり、他はすべて堆積層より出土している。この層は床面直上に堆積しているものであり、床面出土の遺物とさほど時間差はないと考えられる。また住居跡上部は削平されていることから、この両者の時間幅は、住居最終使用時から廃絶直後の時間幅として把えられる。このため厳密な意味で共伴関係を示すものではないが、両者の遺物を以て本住居跡の年代を考える。床面上出土の甕は口縁部が外傾し、体部は若干ふくらんだ器形を呈する。口縁部と体部との境には軽い段を形成し、口縁径と体部最大径がほぼ等しい。外面は口縁部をヨコナデ、体部はハケメ調整後下半部の一部に軽いケズリ(註１)が見られる。内面は口縁部をヨコナデ、体部をヘラナデしている。また、西壁沿いの堆積土中より須恵器杯が１個体出土している。この須恵器は体部が直線的に立ち上がり、口縁径に対し底径の大きな平底を有するもので、底部は全面を丁寧に回転ヘラケズリ調整しているものである。堆積土中から出土した土師器はすべて非ロクロ調整で、杯は外面に明瞭な段を持つものと、段が不明瞭な丸底風のものが出土している。以上のような土器組成は、多賀城跡出土土器の内、Ａ群土器(1)に対比することができる。Ａ群土器は国分寺下層式に対比されており、８世紀前半から後半にかけての年代を与えている。

床面に残されていた土師器甕は、果囲式に属する形態のものであるが、県南の集落跡清水遺跡62号住居跡[2]では国分寺下層式の杯と共伴しており、時期的には国分寺下層式の時期まで残ることを示している。また、底部を回転ヘラケズリ調整した須恵器杯は、国分寺下層式の内でも前半代のものと共伴することが多く、終末段階のものとはほとんど共伴しないという傾向が窺われる。これらのことを考慮するならば、ＳＩ05住居跡は８世紀前半代に位置づけることが妥当であろう。

次にＳＢ01建物跡の年代については、出土遺物などの年代を考察する資料が乏しいため、先に本建物跡と重複しているＳＥ07井戸跡の検討を行なうことにする。ＳＥ07井戸跡は、今回調査した遺構の中では最も遺物の出土量が多かったもので、掘り方と抜き穴の両方から出土している。しかし、両者の土器組成にはほとんど差異がなく、内容的には同様な土器群として把えることが可能である。土師器にはロクロ調整を行なったものが大部分を占め、杯にはその後手持ヘラケズリや回転ヘラケズリなどの調整を加えたものが見られる。赤焼き土器杯が出土しているが量は極めて少ない。このような土器組成は、多賀城跡出土土器の内、Ｅ群土器[3]に比定することができる。このＥ群土器は、土師器と須恵器による従来の組成に須恵系土器（註2）と呼ばれる土器が新たに加わった点に最も特徴があり、三者の量的関係は各遺構によって異なるという。しかし、これに続くＦ群土器[4]では須恵系土器が圧倒的に多くなり、組成の中心となることを見れば、須恵系土器の占める量的な割合は、Ｅ群土器の中での微妙な年代差に反映してくることが考えられる。このことからＳＥ07井戸跡の土器組成は、Ｅ群土器の中でも比較的古い段階に位置づけることができる。Ｅ群土器に対しては10世紀前半（註3）という年代が与えられているが、以上の状況を考慮するならば10世紀前半でも初期のものと考えておきたい。

ＳＢ01建物跡の年代については上限をＳＩ05住居跡、下限をＳＥ07井戸跡に求められる。ＳＩ05住居跡を８世紀前半、ＳＥ07井戸跡を10世紀初頭とすると、ＳＢ01建物跡は８世紀後半～９世紀という長い時間の中に位置づけられる。ＳＢ01建物跡出土遺物についてみると、土師器には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものとがある。前者は体部に段を持たず、内湾気味に立ち上がる器形を呈し、外面を手持ヘラケズリした後、ヘラミガキしているものである。また、後者は底部のみの破片資料であるが、回転糸切り痕を残しているものである。他に土師器甕、須恵器杯・甕なども出土しているがいずれも小片である。土師器でロクロ調整されたものと非ロクロ調整のものが共存する土器組成は、多賀城跡出土土器ではＢ群土器として把えられており、８世紀末の年代が与えられている。しかし、本建物跡の場合、柱穴埋土より出土しているという点から両者が共伴するものか否か判断できず、ロクロ調整された土師器が出土していることを以て、一応９世紀以降の年代を考えておきたい。

註１．ヘラミガキとヘラケズリの中間的な調整技法で、細長い平滑面として認められるものである。これに

ついては練塚遺跡の報告（宮城県教育委員会『宮城県文化財発掘調査略報（昭和52年度分）』宮城県文化財調査報告書第53集 1978）で詳しく説明している。

註2．当教育委員会が赤焼き土器という名称で呼んでいる土器は、この須恵系土器と基本的には同一のものであると考えている。

註3．E群土器は、当初10世紀前半から後半という年代が与えられていたが、その後の検討により、10世紀前半と訂正している（宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡　政庁跡　本文編』 1982）。

(2) **遺構の性格**　ここでは、前節で示した年代観に従い、遺構の性格について考察を加えてみたい。特に、多賀城周辺遺跡で発見されている建物跡との比較を通して、ＳＢ01～04建物跡について考えてみたい。ＳＩ05住居跡については、おそらく当時の一般集落の一部であろうが、他に共存する遺構も発見できず、性格についても言及できないので特に触れないでおきたい。さて、ＳＢ01建物跡と同時期と考えられる建物跡についてみると、まず国司クラスの居館と推定されている多賀城跡館前地区[5]と、市川橋遺跡大臣宮地区[6]発見のものがあげられる。これらの建物跡と対比すると、柱間や柱の太さ、柱穴の規模などに大きな差異が認められる。(註1) また、これら二地区が多賀城の南面に近接した低丘陵上に立地しているのに対し、ＳＢ01建物跡は多賀城の西方約0.5kmの微高地に立地するという占地の違いも指摘できる。また、建物の規模及び占地の点で、ＳＢ01建物跡と共通するものとしては、高崎遺跡高平地区[7]、市川橋遺跡水入地区[8]、山王遺跡東町浦・西町浦地区[9]などの建物跡があげられる。しかし、これらの建物跡は大部分が梁行2間、桁行3間の建物であるのに、ＳＢ01建物跡は梁行2間、桁行5間を呈する点に大きな相違が見られる。周辺遺跡に於て、桁行を5間以上にとる建物跡は多賀城跡館前地区、市川橋遺跡大臣宮地区、多賀城跡調査研究所第37次調査地区[10]の三地区に見られるのみである。桁行が5間以上の建物は、国司の居館と考えられている館前・大臣宮地区などごく限られた所で用いられていることを考えるならば、ＳＢ01建物跡の形態は、その性格を考える上で一つの示唆を与えるものと考えられる。また、ＳＢ01建物跡の方向は多賀城外郭南辺とほぼ一致しているが、これは館前地区、大臣宮地区の主な建物跡方向と共通するものである。更に山王遺跡からは、一般集落ではあまり出土しないような施釉陶器、各種の硯、石帯など官人層の存在を窺わせるような遺物が多く発見されていることからも、本建物跡は多賀城に係る官人層の居宅の一部と考えておきたい。

次にＳＢ03・04建物跡について検討する。これらは、いずれも全体を検出したものではないが、ＳＢ01建物跡と比較した場合次のことが指摘できる。①柱の太さや柱穴の規模が小規模化していること。②柱間が不規則であること。③方向が政庁中軸線や外郭南辺のいずれとも一致しないこと。このような特徴をもつ建物跡の類例としては、①・②の点では、市川橋遺跡水入地区発見の建物群の中に数棟見い出すことができる。更に③の点では高崎遺跡高平地区発見の建物跡に同様の傾向が認められる。水入地区の建物跡は、溝で区画された空間に井戸を伴なっ

て発見されており、9世紀という年代が与えられている。また、高平地区の建物跡は建物のみで構成されており、10世紀以降のものと考えられている。このように、これらの地区では集落の構成要素として掘立柱建物が主体となっており、本地区SB03・04建物跡についても同様のことが言えよう。奈良・平安期における一般的集落遺跡では、竪穴住居が集落構成の主体となっており、この点からすれば多賀城周辺地域の遺構のあり方は一般的な集落跡とは区別されるものと考えられる。SB03・04建物跡は、多賀城に近接するという地理的環境からも多賀城との関連性を指摘できるが、ここで性格について言及することは資料的に困難である。

このように、本地区は8世紀以降10世紀に至るまで一貫して居住空間として機能してきたことが判明し、多賀城周辺地域の集落の様相を知る新たな資料を追加することができたと考えられる。しかし、その具体的な性格については将来資料の累積を待って解決してゆきたい。

註1．館前・大臣宮地区の建物跡は、柱間が約10尺、柱の太さが30～40cmである。

註2．高平地区の年代については、当初11世紀以降と考えられていたが、その根拠となった須恵系土器の年代観が変わってきたため、多賀城市史編纂委員会『多賀城市史　5　歴史史料』1985 では10世紀頃のものと訂正している。また、この件については、多賀城跡調査研究所の白鳥良一氏から御教示を得た。

引用・参考文献

1．白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要Ⅱ』1980

2．宮城県教育委員会「清水遺跡」宮城県文化財調査報告書第77集『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』1981

3．1に同じ

4．1に同じ

5．多賀城市教育委員会『館前遺跡－昭和54年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書 第1集 1980

6．多賀城市教育委員会『市川橋遺跡調査報告書－昭和58年度発掘調査報告書』多賀城市文化財調査報告書 第5集　1984

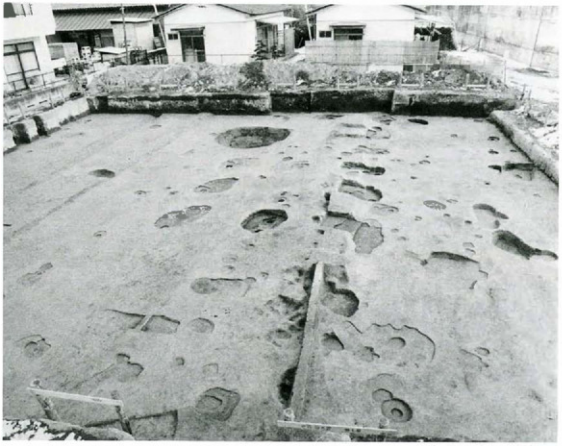
7．宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡－昭和48年度発掘調査概報－』宮城県多賀城跡調査研究所年報 1973　1974

8．宮城県教育委員会『多賀城市高崎　水入遺跡発掘調査報告書』宮城県文化財調査報告書第84集 1982

9．多賀城市教育委員会『山王・高崎遺跡発掘調査概報』多賀城市文化財調査報告書第2集　1981

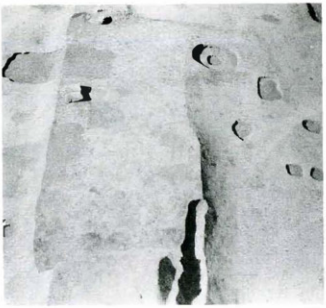
10．宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報1980　1981

調査区全影（南から）



調査区全影（西から）

図版 1



SI 05竪穴跡（東から）と出土遺物

1 土師器 甕
2 須恵器 杯

SB 01建物跡A．B期重複状況

SB 02建物跡（東から）

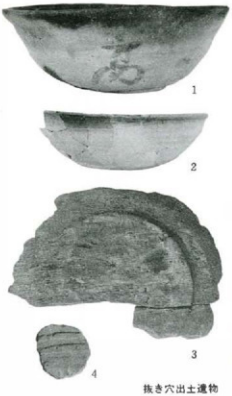
SB01建物跡B期柱穴

SB 03建物跡（北から）

SB 01建物跡B期柱

SB 04建物跡（西から）

図版2



抜き穴出土遺物

1	土師器 杯	3	木製品 皿
2	須恵器 杯	4	円盤状土製品

SE 07井戸跡検出状況

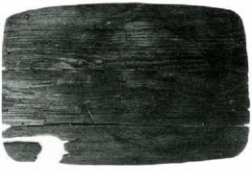
SE 07 井戸跡遺物出土状況

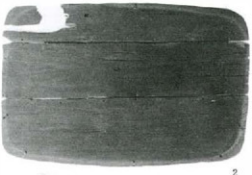
SE 07井戸跡内部構造

図版3

SE07井戸跡曲物設置状況

1

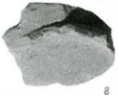




2

3

7



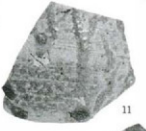
8

4

9

10

5



11

12

6

14

13

1 曲物容器（SE07出土）	7～10 灰釉陶器椀（遺構外出土）
2 桶 鉄 箍 板（ 〃 ）	11 灰釉陶器版（ 〃 ）
3 土師器杯（SK09出土）	12 灰釉陶器段皿（ 〃 ）
4 土師器杯（SK08出土）	13 二 面 硯（ 〃 ）
5 灰釉陶器椀（ 〃 ）	14 円盤状土製品（ 〃 ）
6 カワラケ（遺構外出土）	

SE07，SK 08・09出土遺物，遺構外出土遺物

図版4

多賀城市文化財調査報告書第10集

山　王　遺　跡

昭和60年度発掘調査報告書Ⅱ

昭年61年3月31日発行

編　集　多賀城市教育委員会
発　行　多賀城市中央二丁目1番1号
　　電話（022236）8－1141
印　刷　藤　印　刷
　　多賀城市大代一丁目6番9号
　　電話（022236）7－0157